

そうしてもう、何度、中間地点で行き来されたかわからない。

恐ろしいほどの苦しさにも慣れはじめ、熱に浮かされながら孔内の異物感をやり
過ごしていると――

「っあ…、ああ……、！？あ” …っ、♡」

奥側へ擦り上げられた拍子に、また奇妙な感覚を内壁が拾いあげた。

しばらく前に感じた、あの甘い感覚と同じだ。

孔内は異物感に濡れ、男のものが行き来するのも今では随分たやすい。そこを
すべるように移動されると、気持ち悪さと紙一重の、絶妙な疼きがほとぼしるの
だ。

「…あ…♡っああ…っあ” っ♡♡…だめ…っ…、」

苦しさとは別の理由で、少年は男を拒みはじめていた。

奇妙な感覚から気を逸らせずいるうち、それはどんどん強くなっていく。これ以
上躰のなかを掻き回されるのは嫌で仕方ないのに、そう思えば思うほど、もっと
なかで動いてほしいというような、倒錯めいた気分支配される。

金髪男は口元に薄い笑みを浮かべたまま、一言も喋らない。

(さっきまであんなに喋ってたのに……)

しんと静まり返った室内に、衣擦れの音と少年のあられもない声だけが響く。

三人からの視線も加わって、少年の羞恥をますます煽りたてた。

(く……っくそ……、なんで……なんでおれが、こんなこと……っ、)

涙と熱にぼやける瞳^めで、キッと金髪男を睨む。

それだけで目に溜^たまっていた涙がまた溢れて、余計泣き顔をさらす羽目になってしまう。視界が濡れてよく見えないが、金髪男が口元の笑みをより深くした気がした。

「気持ちよくなってるでしょ……？」

金髪男が少年の痴態から目を逸らさず、珍しく小さな声でささやきかけてくる。

チャラチャラした見た目の男だと思っていたが、こんな低い、落ち着いた喋り方もできるのかと内心驚く。喋り方が少し変わるだけで、何だか先程までと別人のように感じた。

よく見れば顔も流行りの男性アイドルみたいに整っているから、余計にそう思うのだろうか。

「ああ……っ♡♡あ……っ♡、」

ゆっくり揺すり上げられながら、ぼんやりと夢の中を漂うような心地になっていく。
全身からはいつしかすっかり力が抜けきり、しゃんとしようと思っても力を入れる
のが難しい。

「んう…っ…っあぁっ♡♡」

そうして無防備になった躰の中心に、変わらぬ硬さを突き立てられる。
隘路の半ばを短く移動されるだけのその動作に、恥辱に熱持った躰をひどく掻
き乱されていく。

行為に対する嫌悪感は消えうせていた。男に動かれるまま躰を揺すられ、孔内
に奇妙な疼きが生じるのをふせぎようもない。体内を占拠される圧迫感にさえ、
甘やかな刺激を感じはじめている。

「…あ…っ♡♡あぁ…っ♡、あ……っ、い…や……あ……、っ…っ、」

これ以上なかを行き来されては何かがおかしくなる気がして、少年は必死に頭^{かぶり}
を振ろうとする。けれど力が抜けた状態では、それも首をわずかに傾げるだけに
終わってしまった。

苦しさが薄れると、ジンジンと両胸から駆け続けている痺れからも、いっそう意識
を逸らせなくなる。

「んう…っ…♡ああ…っ…っ、♡♡」

胸からの電流に耐えかね、広く首筋をさらす。

と同時に男が孔の奥側、少し深い場所へ挿入^{はい}りこんできて、

「あああ…っ！♡♡、」

誤魔化しようもないほど大きな声が漏れた。それが合図とでもいうように、金髪男は腰の動きを速める。

「！？！あ”♡っ…あ”あっ！！っ♡♡、あ！、」

最奥に近い場所へと腰を挿入^{いれ}られるたび、宙に浮いた爪先が面白いように跳ねる。

ぬちっぬちゅっ、とわずかに聞こえてくるのが、ぬかるんだ孔内を男が擦り上げる音なのだとわかった瞬間、

「あっ、♡、あ♡♡♡、」

熱持った孔内がひくりと震えた。

ただでさえ熱持った顔が、なぜかいつそう熱くなる。

「あっ！♡♡あああ…っ♡あ…♡♡♡！、」

一度気になりだすと、もう孔のなかのことしか考えられなくなる。

少年の意図とは無関係に、孔の内壁がひくん、ひくん、と波打つ。

それがまるで、なかの男に自分から絡みついているようで嫌だ。

「やっぱり……気持ちよくなってるでしょ」

そう言って少年の髪を撫でてきたのは店長だ。

汗で額^{ひたい}にはりついた髪を、大きな指で愛おしげにたどられる。

優しげな仕草にうっとりとしかけるが、それよりもはやく金髪男が擦り上げてくる。

「あ♡、あああ…っ♡、♡」

自分の声とは思えない、甘ったるい声。

男のものがぬるぬると行き来する感覚に、孔内がますます波打つ。

「もっとかかると思ったのに……。君、才能あるよ」

金髪男が、けなしているのか褒めているのかわからないことを言う。

その直後、

「あ、ああ…っ！！っ♡♡」

喋り方とは裏腹な、重い一突きを最奥へ受ける。

力が抜けきっていて、衝撃がもろに体内へ響いた。

乱暴にすら思えるその扱いを、もう嫌とも苦しいとも思えない。

「あっ！♡♡ああ…っ♡っあああっ…♡♡♡」

男は続けざまに最奥へ打ち込んできた。

硬い雁首が何度も奥深くに突き立てられ、そのたび躰の芯を甘い雷が疾る。

「あっ♡♡ん” うっ♡あっ♡あっ♡♡あっっ…♡っ…♡、」

頭の中が熱く、脳が膨張している感じがする。

熱に浮かされたまま、男の思うままに揺さぶられる。孔奥に硬い笠の張り出しが
めり込むたび、痛みにはではなく卑猥な痺れに腰がびくついた。

「あ…っあ♡♡、んあ…っ！？っあ！♡ああっ！♡♡、」

なかを穿たれるスピードが増し、驚いた孔奥が引きつれたように窄まる。まるで
男をより深みへと吸い込もうとするかのようだ。

実際、図太い幹のような男の先端が、先程からいっそう奥へすべり込み、深くへ喰い込んでくる。自然と絡みつく粘膜がつぶさに男の形を拾いあげ、孔のなかでの密着感は増していく。

「あっ♡あッ♡♡あぁっ♡っ」

こんなの嫌なはずなのに——。

軀は嫌悪感とかけ離れた甘ったるさに満ちている。

リズムカルに奥を打たれる刺激と、胸からの痺れが体内で複雑に絡み合う。孔奥よりもずっと奥、軀の奥深くがきゅうっと切なげに引き絞られていく。

「あっ♡♡あっ♡っい…いや…、あ…っ♡あぁっ♡♡っ、♡、」

軀をびくびくさせるだけでは、もうこの悩ましい疼きを逃がしきれなくなっていた。

「や…あぁっ♡♡あっ♡っ！、」

否定の言葉も、容赦のない律動に掻き消えてしまう。

否応なくせり上がってくる甘い痺れが、気をやりそうなほど濃い刺激となり体内を駆けめぐる。